



月刊部品新聞

2012年2月
第70号

編集・発行 Unit

高校生の移籍問題

先日東北地方にあるスポーツ名門高校の陸上部の部員が、全く異なる地域の学校にまとまって転校することがニュースで流れました。

当初のニュースでは震災の影響で練習環境の確保が出来ず、やむを得ずということでした。

しかし受け入れ側の愛知県高体連は震災特例を認めない決定をしました。これにより転校日の3月1日から半年間は大会に出場することが出来ません。

やむを得ない事情

まず考えなければいけないのが高校生において練習環境の確保が出来ないというところが、やむを得ない転校の理由になるかということ

です。高校生においては、家族の都合で引越しなどの

場合は、やむを得ない事情といえると思います。しかし練習環境の確保が出来ないと理由はやむを得ない事情といえるのでしょうか。

学校側の対応

今回の騒動には学校の対応にも問題があるのではないかと思いません。

確かに全国大会で学校が期待する成績を残せなかったかもしれない。だからといってレギュラーとして活躍した彼らに見切りをつけ、東日本大震災を理由に転校を許可することは、結果でしか判断をしていないことになりません。

この学校の姿勢は前回書いた、まさにロンバルデアン倫理そのものではないでしょうか。

これを教育現場である高等学校自体がその様な

考え方を持つことは、あつてはならないことだと思います。

その様なことを続けていけば、部活というよりも学校に対しての信頼感がなくなり、競技を問わず入学したいと考える中学生は減少していったまうと思いません。

しかしなぜ

報道では監督の更迭がきっかけと書かれています。

実は更迭された監督も異動先がそこに競技者たちを転校させようとしていたことが先に出た報道から出てしまったといえることも考えられます。

あるいはその逆で競技者たちが更迭されたコーチの新しい勤務地が、別の場所を指導とすることを知り、追いかけていったとも考えられます。

そここのところは監督と競技者の間でどのような話が持たれたかは分かりませんが、今後話が出てくるでしょう。

高校生として

高校は部活だけをする場ではなく、思春期における健全な人格形成を行う場です。スポーツ強豪校においては学校の本質を見失っているところも多いのではないのでしょうか。

今回の高校生において残念なことは、今まで彼らにその様な指導をしてくれる人に出会えなかったことではないでしょうか。

彼らは今回のことをどのよう

に考え、今後の人生を歩んでゆくのでしょうか。

死ぬために生きるスポーツに限らず、目標に向かって最大限の努力をすることが非常に重要なのではないかと思います。

その目標に達することが出来なかったときに、初めて「結果が全てではない」と考えてしまうのは、単なる回避行動に過ぎません。

普段からそのことを意識しつつ、目標に向かって自分の最大限の努力を行うことが大切なのではないかと思いません。人はいずれ死ぬ。しかしその死に向かつて、自分は何のよう

Unit 代表 澤野 博 (さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部品となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。NSCA CSCS、JADA DCO など保有。
ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。
0422-34-5055 (Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com